沖縄について

2000H041　小池紗恵子

目次

１．はじめに

２．基地問題

＊　主な米軍提供施設・区域
＊　県民生活への影響

３．沖縄の暮らし

＊　水産業
＊　農業
＊　建築

４．方言

＊　沖縄方言の基本的な言葉とあいさつ

５．沖縄の自然

＊　島々の風景文化
＊　沖縄の動植物

６．食文化

１.はじめに

はじめに、私がなぜ論文を沖縄に決めたかという理由を話すと、私は高校の修学旅行で沖縄へ行った。沖縄は、同じ日本と思えないほどとてもきれいでした。そして、日本で唯一戦争時に上陸された土地でもある。私はこの旅行で生々しい戦争の跡とも言える場所へ行った。防空壕、海軍壕、ひめゆりの塔、永遠の世界平和の悲願をこめられた平和祈念堂。私はさまざまなその戦争の事実を残した場所へ行った。そして、沖縄で一番問題ともなっているアメリカ軍基地。バスの中からもその基地の外側を見ることができる。沖縄のほとんどがこのアメリカ軍基地で占められている。沖縄に基地があるのではなく、基地の中に沖縄があるのではないかと錯覚してしまうほどだ。米兵や米軍関係者が事件、事故を起こすたびに沖縄は基地の重圧を感じているだろう。

そんな沖縄は日本で唯一、亜熱帯気候に属している自然に囲まれた島だ。澄み切った海、ほかでは見られない多数の国有種の動植物がいる。そして本土とは少し違った、亜熱帯気候ならではの食材を使った沖縄独自の調理法や料理。主に豚肉を使った料理が多いという。

沖縄の料理はとても健康に良いという。そのせいか、長生きをする人がとても多い県だ。

このように沖縄本土とは違ったところがいろいろとある。そうゆうところに私はとても関心をもち、沖縄についての論文を書こうと思った

２．　基地問題

まず沖縄の概況を話すと、日本の南、東シナ海の東西１，０００キロ、南北４００キロにおよぶ広大な海域に点在する１６０の島々からなっている。そのうちの沖縄島、宮古島、西表島、石垣島などに約１２９万人の人々が住んでいる。現在は日本の一県であるが、奄美、鹿児島県を含めて、かつては「琉球」と呼ばれた独立国であり、中国、朝鮮、東南アジアの国々と交流を盛んに行い繁栄した国であった。

１９４５年４月、沖縄に米軍が上陸、「鉄の暴風」ともいわれるほど激しい砲撃を受け、死者約２０万人そのうち１５万人までが沖縄県民であった。

激しい戦闘のため、緑豊かであった島の自然は失われ、墓も破壊された。戦争は、人命のみならず歴史や文化を破壊し、地球上の自然環境をも殺していった。

沖縄県は１９５１年調印された対日講和条約により、日本から切り離され、米軍政下に置かれた。米軍によって建設された滑走路と道路。沖縄戦中、戦後に米軍は、まるで白紙で地図を書くように戦闘用の施設を建設していった。もとの地形などおかまいなしに、抵抗する住民を「銃剣とブルドーザー」で脅し、山を削り木を切り倒して、基地を建設した。住民がもどるべき故郷は基地の中に消えていったのである。

沖縄が日本へ復帰したのは１９７２年である。しかし、米軍基地の状況は今もほとんど変わっていない。

「戦争の世紀」とも言われる２０世紀も終わり、新しい世紀に入った。同時に、戦争を知る世代は少なくなり、ともすれば「戦争の記憶」が風化してしまうことになりかねない。

世界を見ると、湾岸戦争、コソボ紛争、中央アジア・キルギスでの日本人の拉致事件と武力衝突、最近ではまだ記憶に新しいアフガニスタンへの空爆など、局地的な紛争は絶えることなく起きている。なぜだろうか。その問いには明快に答えられないだろう。しかし、少なくとも日本は「戦争の記憶」を風化させず、「なぜか」と問い続けることが使命だと考える。

沖縄は日本で唯一上陸を許してしまった場所である。そのおかげで、沖縄が一番基地の占有率が高い。沖縄にはたくさんの米軍基地がある。国道５８号線を北上すると金網の囲いが続き、場所によっては両サイドとも金網に挟まれた道もある。

その面積は、県土面積の約１１％を占め、とりわけ人口や産業が集中する沖縄本島においては、約１９％を米軍基地が占めていて、米軍人・軍属約５，２０００人が住む。このことから、望ましい都市形成や交通体系の整備、産業基盤の整備など地域の振興開発を図る上で大きな障害となっている。沖縄県は日本国の国土の０．６％にすぎない地域である。

街の中心部に基地を持つ沖縄本島中部の主要都市（沖縄市、宜野湾市、北谷市、北中城村）では、周辺集落間の交通網が遮断され、基地周辺道路においては、交通渋滞が引き起こされています。また、基地周辺の住宅・商業地域は、住宅等が密集し、道路の整備などが不十分な状況になっている。

那覇空港や那覇港周辺は、地域の商業的立地条件が良好であり、開発効果の高い地域だが基地の存在が用地の確保等の大きな障害となっており、地域振興上の制約となっている。

・　主な米軍提供施設・区域

- 普天間飛行場

  普天間飛行場は、宜野湾市の中心にある。海兵隊第３海兵遠征軍の第１海兵航空団隷下３６海兵航空軍のホームベースとなっており、ヘリ部隊を中心として７１機の航空機が配備され、在日米軍基地でも岩国飛行場と並ぶ海兵隊の航空基地となっている。同飛行場には、滑走路、格納庫、通信施設、整備・修理施設、倉庫があるほか、福利厚生施設等の設備があり、航空基地として総合的に整備されている。

  基地のまわりに１６の学校があり、校舎は基地のフェンスと隣り合わせである。こどもたちは爆音、事故の危険に常に身をさらしながら学校に通わなくてはならない。また、防衛庁施設による防音・冷房付き校舎は、冷房のかかりすぎによってこどもたちが体調を崩すという二次的な被害をもたらしていることが明らかになった。

- 北部訓練場

  同訓練場は、海兵隊の管理下に、海兵隊の各部隊のほか、ヘリコプター演習、脱出生還訓練、救命生存訓練及び砲兵基本教練などの訓練基地として使用されている。また、同訓練場は、米軍がフィリピン及びパナマから撤退したことにより、米軍が有する唯一のジャングル訓練施設ともなっている。

- 嘉手納飛行場

  嘉手納飛行場は、沖縄県の中部嘉手納町にある。各３００ｍのオーバーンを含め約４，０００ｍの滑走路を２本有する、極東最大の空軍基地である。同飛行場は、５空軍指揮下の第１８航空団のホームベースなっており、戦闘機、空中給油機、空中早期戒管制機など１００機が常駐している。飛行場は、他のテナント部隊の役割と併せて防空、反撃、空輸、支援、偵察、機体整備等総合的な役割を担っている。

  嘉手納空軍基地は、Ｆ－１５など米軍の主力戦闘機が毎日のように離着陸訓練を行う。嘉手納基地は嘉手納町の約８２．８％を占める。爆音、電波障害など日常的な周辺地域への影響は大きく、特に爆音による住民への健康障害が問題となっている。

- ホワイト・ビーチ

  ホワイト・ビーチ地区は、第７艦隊の兵站援港として、燃料及び物資の補給や軍需物の積み降ろし港として利用されています。また、原子力軍艦が休養、補給及び維持のため寄港するほか、強襲揚陸艦ベローウッドの長県佐世保基地への配備に伴い同艦の洋上訓練際の兵員、装備、弾薬等の補給基地として同が寄港するようになった。

～県民生活への影響～

沖縄は土地だけでなく、海も空も米軍に支配された状態にある。民間航空機は、米軍機優先の沖縄の空での飛行のため常に危険を強いられている。また、沖縄には離島に６つの射爆場があり、そのうちの一つの鳥島に１９９５年アメリカ本国では使用禁止されている劣化ウラン弾１５００発が発射された。鳥島は無人島であるが、すぐ近くに久米島があり多くの人々が住んでいる。人体や環境への影響が懸念される。

沖縄県における広大な米軍施設・区域の存在は、県民生活や自然環境に様々な影響を与えている。

とりわけ、日常的に発生する航空機騒音による基地周辺住民の健康への影響や戦闘機・ヘリコプター等米軍機の墜落事故及び油脂類・赤土等の流出、実弾演習による山林火災等米軍基地が原因となっている事件・事故等による県民生活及び環境への影響が問題となっている。

また、米軍人等による刑法犯罪は、復帰後これまで、約５，０００件にのぼり、そのうち凶悪事件が５２７件、乱暴な犯罪が９４９件も発生するなど、県民の生活の安全確保や財産の保全に大きな不安を与えていまる。

航空機事故は、一歩間違えば住民を巻き込む第参時になりかねないものであり、周辺住民はもとより県民に大きな不安を与えている。

平成１０年にキャンプ・ハンセン内で発生した米海兵隊所属のヘリコプター墜落事故をはじめ、平成１１年にはまたもヘリコプターが、北部訓練場の沖合に墜落し、乗員４名が死亡する事故が起こった。軍事演習の最中、米軍機から落下してきたトレーラーの下敷きになって、少女が亡くなった。また同年にハリアー機が嘉手納飛行場を離陸後、滑走路に墜落する事故が起こり、県民に大きな不安を与えた。沖縄では平穏に生活する権利さえもない。県外でも、嘉手納基地所属の飛行機が石川市宮森小学校に墜落し、死者１７名負傷者１２１名の第参時だった。被害者のほとんどがこどもたちであった。こうした米軍関連の事件事故は、復帰前後も変わらずに起こり続けている。被害者に対する公的な補償はほとんどなされず、事件事故の加害者の罪はうやむやになってきた。基地の存在による人権侵害は深刻である。

嘉手納飛行場及び普天間飛行場周辺においては、半数以上の測定地点で、環境庁の定める基準値を超える航空機騒音が測定されており、地域住民の日常生活及び健康への影響が懸念されている。また、基地周辺の学校では、授業が度々中断されるなど教育面でも影響がでている。

キャンプ・ハンセン演習場では、度重なる実弾演習や、それに伴う山火事の発生などにより、大切な緑が失われ、山肌が剥き出しになるなど、かけがえのない自然環境が損なわれている。

また、同演習場では、無数の不発弾が存在し、その処理には莫大な費用と長い年月を要することが予想される。

平成７年に返還された恩納通信所では、基準値を超えるＰＣＢ等の有害物質が汚水処理漕内の汚泥から検出され、日本政府により汚泥の撤去が行われた。

また、平成１０年には、嘉手納飛行場内にＰＣＢを含む廃油を投棄したため池が存在した旨の報道がなされ、米国政府による環境調査や日本政府による保管調査が行われたところだ。これらの調査の結果、人の健康に影響はないとの結論がでたものの、地域住民は米軍基地から派生する環境問題に不安を募らせている。

米軍は、文化をも破壊する。沖縄の歴史が刻み込まれた土地になんの遠慮もなく基地を建設してきたために、基地内の歴史的遺跡などが新たな施設建設によって破壊される危険がある。きちんとした、地域住民、自治体への説明もほとんど行われていない。新たな基地建設は常に環境破壊の危険をはらんでいる。９６年には勝連半島において縄文時代の遺跡が破壊されたことが判明した。

基地建設により土壌が荒らされることによって起こる赤土流出も大きな問題となっている。伊江島ではハリアーパッドの建設訓練のために、建設・破壊を繰り返しているため、土壌流出が激しい。その結果、流出した赤土が海を汚していく。

基地からの有害物質による土壌や水質の汚染。井戸にジェット燃料が流れ込んで燃え出す事故がおこった。いわゆる「燃える井戸」。嘉手納基地と恩納通信施設の汚水処理槽ではＰＣＢ、水銀、カドミウムなどの汚染が発覚した。米軍には原状回復の義務はなく、やりたい放題であり、これに対し国も厳しい態度をとろうとしない。

金武町では、町内を米軍が完全武装で「行軍」したり、近くの海岸で演習が行われる。環境汚染はもちろん、米軍による事件事故はたえない。また、軍用地料、政府から支出される補助金など、基地関連収入は町の経済に深く入り込み、いわゆる基地経済というゆがんだ経済構造となり、自立をさまたげられている。県道１０４号越え実弾射撃演習は、金武町の山々をいためつづけてきた。演習によって森を失った山は赤土がむきだしとなり、雨が降るたびに、川をつたって赤土流出する。この赤土が海に流れ込み、海を汚染していく。

米軍基地の存在はすなわち、爆音などの騒音被害、軍事演習による事故、米軍人による犯罪と常に隣り合わせであることを意味する。人間の生活環境を直接的間接的に破壊し続ける。軍隊が危険であるのは、「有事」「平時」には関係ないのである。米軍は日米安全保障条約に基づき「日本の安全のため」に駐留しているというが、なぜ沖縄県民が、これだけの犠牲を払わされなければならないのだろうか。

３．　沖縄の暮らし

膨大な米軍基地に土地を奪われた沖縄は、復帰前まで基地経済に頼り、主な産業といえばサトウキビやパイナップルを期間作物とする農業や、さんご礁の海で細々行う漁業であった。復帰後、観光産業が急速に伸びると、水産業も亜熱帯の気候風土を生かし、技術向上や生産性が多様化した有望な産業へと変わっていった。米軍基地は相変わらず残ったが、基地経済からの脱却は図られつつある。

○水産業

恵まれた漁業の沖縄周辺の海。熱帯性海域に特有なサンゴ礁沿岸域ではカツオの一本釣り漁やタマンなどの刺し網漁、マグロ延縄漁などが伝統的に行われており、近年では、モズクやクルマエビ養殖なども盛んになっている。

沖縄は、日本の南西端に位置する１６０の島々からなっていて、その周辺海域は、サンゴ礁漁場や沿岸付近の良好な漁場に恵まれている。また、マグロやカツオの回遊魚などの漁場も形成されており、良好な自然を生かした漁業が行われてきた。その漁法は、１０トン以上の漁船で行われる沖合漁業と、１０トン未満の小型漁船で行われる日帰りで操業する沿岸漁業とに大別される。その種類は、一本釣り、刺し網、延縄、追い込み網、定置網などがある。また、その漁法によってとる魚も分かれており、刺し網や追い込み網ではヒメジ、アジ、アイゴ、タカサゴ、ブダイなど、延縄や一本釣りなどの釣り糸漁では、カツオ、マグロ、カジキ、シロダイなどを釣っている。特に、追い込み網漁は、南西諸島全域で古くから行われていた漁法で、沖縄の糸満漁師から日本本土やインドネシアにも伝わっている漁法だという。沖縄には那覇市港町にある県漁連、糸満にある水産公社など各地に２０の卸売り市場があり、朝早くから仲買人やさまざまな人々でにぎわっていて、ほとんどが県内で消費されている。しかし、最近では流通の整備がなされ、上級マグロや、ソデイカなどは県外へも出荷され高い評価を受けている。しかし近年では、開発に伴う漁業の喪失や、赤土流入による漁場汚染、さらに獲りすぎによる魚の減少などの課題を抱えるようになり、パヤオという資源管理型漁業やモズク、クルマエビなどの養殖なども盛んになってきている。

沖縄の漁師の漁法といったら、追い込み網漁を思い起こすくらい有名な漁法である。４０人くらいで、２月から５月と８月から１０月に行われる、網を船と船、または海底に固定した網と、その一方を船に結びつけた網の中に人間が潜水して魚を追い込んでいく漁法である。他地域では、能率の良さから制限や禁止されたこともあったという。いろいろな種類があるが、糸満漁夫、金城亀の考案とされるアギヤーとよばれる方法が知られている。

魚が木材など漂流物の下に集まる習性を利用して、ブイを海面に浮かせて漁をする方法をパヤオという。沖合に１，０００m級の鎖をつけて、そのまま浮かべただけのものだ。小さな魚は大海の中で身を隠す場所や休息場所を求めているといわれており、パヤオはそ

れらの魚にとって絶好の場所だという。そして、小さい魚が集まるとそれを狙う中型の魚が集まり、さらにそれを狙って大きな回遊魚が集まるという食物連鎖が起きるのである。

だから、カツオやマグロなどの大型回遊魚もこのパヤオ周辺では獲れる。確実に魚が獲れるパヤオ周辺。新しい管理型漁法の誕生である。

沖縄には、生鮮魚介類の卸売り市場として、県漁連、那覇地区漁協及び沖縄県水産公社が開設する「地方卸売り市場」と、各地漁協が開設する「その他の卸売り市場」の計２０ヶ所がある。那覇市の泊港にある県漁連と那覇地区漁協を例にとると、天候によって搬入される魚の漁が違うので一概にはいえないが、夜中の１２時ごろから魚が運び入れられて準備が始まり、早朝５時３０分からセリが始まる。早ければ２０～３０分で終わるし、長ければ８～９時ごろまでかかるという。カツオやマグロを中心にさまざまな魚が並ぶ卸売り市場である。

沖縄を代表する魚といえば県漁であるグルクン（和名：たかさご）が挙げられる。泳いでいるときは青い色をしているが、船に上げられたら赤くなるという不思議な魚でもある。

他に思い浮かべる魚といえば、イラブチャー（和名：ぶだい）である。沖縄では高級魚の一種だが、刺身では派手な色の皮がついたまま出されるので、初めての人はちょっと引いてしまうような魚でもある。マンビカー（和名：シーラ）という１ｍ５０ｃｍほどの頭が丸い魚もいる。墓も個性的な魚ばかりである。沖縄の魚は脂がのってない、色が不気味だという人もいるが、白身魚のミーバイ（ハタ類）は刺身や魚汁に、アイゴ類は塩煮にすると美味しく、それぞれの魚にあった料理法がある。

沖縄を代表する伝統的な漁船のことをサバニという。くり舟とその発達型の木材をはり合わせたハギ舟がある。くり舟は周囲２ｍ前後の巨木を使うことから、進貢船用の用材不足を懸念した王府は１７３７年、くり舟を禁止しハギ舟を奨励した。それほど大きくないが、前から見るとＶ字型で、風や波の抵抗を受け流す形になっている。速度も速く櫂で漕いで時速５～６ノット、帆をあげれば時速１０ノットはでるという。軽量で取り扱いやすいサバニは、気候風土が生んだきわめて合理的な舟だったのだ。

沖縄ではモズクを養殖していることでも有名である。方言名はスヌイ。沖縄での養殖は１９７７年から始まり、日本で消費されるほとんどが沖縄産のモズクである。オキナワモズクは他のモズクに比較しても、健康を保つために欠かせないミネラル、食物繊維に富み、低カロリーのヘルシーさで、特に注目を浴びている食品である。養殖モズクは、１２月から１月ごろにかけて種をつけた網を、２～５ｍの海の底に張って育て始め、３ヶ月ほどで収穫できる。沖縄の人間は海藻類が好きな人が多く、モズクも二杯酢でとにかくたくさん食べるが、沖縄風てんぷらの具にしても美味しく、いくら食べてもあきない食べ物である。

○農業

かつて、沖縄は温暖な気候風土に恵まれながら、サトウキビとパイナップルが主であった。現在では熱帯果実や花卉など多種多様で付加価値のある作物を中心に栽培されるよう

になっている。

亜熱帯気候の沖縄では、古くから栽培されているパイナップルに、収穫量が増えているマンゴーやドラゴンフルーツ、地元では未熟の青い果実を野菜として食べるパパイヤ、香りの良い島バナナやグアバ、ビタミンＣが豊富で注目を集めるアセローラをはじめ、レイシ、レンブ、パッションフルーツ、ゴレンジ、カニステルなど豊富な種類の果実が栽培されている。独特な味わいと香りを持つ熱帯果実は沖縄の農作物産業の有望株といわれている。

沖縄の農業は中国と密接な関係を持つ。古くから栽培されていたイモやサトウキビは琉球王朝時代に中国から持ち込まれた。イモは、太平洋戦争終結後、しばらく沖縄の主食として多くの家庭で食された。１９６０年代になるとサトウキビやパイナップルの栽培が基幹産業として提唱され大きく発展した。１９７２年の復帰以降、南国の気候を利用した特色ある農産物が栽培されるようになった。現在では、これまでの基幹産業であったサトウキビやパイナップルも品種改良が進み質も高まり、サヤインゲンやゴーヤーなどの野菜やキク、ランなどの花き、マンゴーなどの熱帯果実などが県外に出荷されるようになっている。最近は様々な研究機関が作物の持つ成分を研究し、紅芋やシークァーサーなどに薬効がある成分が含まれると発表。沖縄の農作物が全国的に話題になっている。

沖縄の言葉で「ウージ」と呼ばれるサトウキビは、温暖で降水量の多い沖縄に適した作物で、県内各地で栽培されている。県全体の耕地面積の６５％を占め、農業生産額では約３０％を占める重要な農作物である。サトウキビの刈り取りは、「ウージトーシ」または「ウージカチー」と呼ばれ、毎年１月から３月にかけて行われる。この作業がサトウキビ栽培の中で最も辛いといわれている。ほとんどが手作業のため、近所で「ゆいまーる」という共同作業が行われるのだ。現在は機械化が進み刈り取りの風景も変わりつつあるという。

刈り取ったサトウキビは、トラックで精糖工場へ運ばれ、砂糖にするのである。荷台いっぱいにサトウキビを積んだダンプカーはほろ苦い冬の風物詩となっているようだ。砂糖は沖縄県の特産品として首都圏へ送られ、その生産額は、毎年、２００億円以上にもなり、農家の人々の生活を支えているのだ。

パイナップルも県の重要な農産物のひとつである。熱帯果実の代表格であるパイナップルは、日当たりや水はけのよい土地に良く育つ。他の農作物の栽培に適していない土壌にも育つので、産地は原野を切り開いた本島北部や石垣島などにパイナップル畑が多い。最近では、外国の製品が安く輸入され、売れ行きが低迷している。生でも加工品でも外国産に対抗できるように、美味しくて収穫量の多い品種や栽培方法の改善に努力している。

紅芋はポリフェノールが豊富で、美容や健康によい食品としても注目を集めている。鮮やかな紫色で、甘い。鹿児島のムラサキ芋は、もっぱらお菓子などの加工用で、芋そのものを食する紅芋とは品種が異なる。県内各地で生産されているが、読谷村が産地として知られ、村の観光と紅芋を中心にした「むら咲きまつり」と称する産業祭りも開催されるほどだ。紅芋を使ったケーキや和菓子なども開発されている。

我々も夏になるとよく食べるスイカは本部半島で多く栽培され、主に今帰仁産が有名である。甘味と水分と果肉のシャリシャリ感のバランスがよくて美味しいと評判で、今帰仁スイカのブランドとして首都圏に出荷されているほど人気がある。

マンゴーは果樹生産の主力品目として全国に出荷されている。沖縄では数種類が栽培され５月下旬から１０月ごろまで市場に並んでいる。沖縄の完熟マンゴーは熟さないうちに収穫する外国産に比べ、味も香りも濃厚である。高値がつくマンゴーだが、収穫シーズンになると等級外の不揃いな形のマンゴーが、産地である北部方面で安く売られている。

冬春の風物詩として定着した電照栽培の小ギク。電照菊とは、夜、たくさんの電球で菊に光を当て、出荷時期に合わせて開花を調節する栽培方法である。キクは強い光を当てられ、昼間と錯覚して懸命に成長しようとがんばっているのである。沖縄の花き生産は菊が約８０％を占めているが洋ランやストレリチアなど南国らしい花々も栽培されている。

最近、様々な病気に効果があることが発表されたシークァーサーという沖縄原産の野生の柑橘類が注目を集めている。ビタミンＣを多く含み、ビタミンＢ１、カロチンなどを含んだヘルシーな果物である。実が青い未熟の頃は、レモンと同様に調味料として使い、黄色く熟したらそのまま食べるかジュースやゼリーなどに利用する。産地である大宜味村では、黄金色の実から「クガーニ」と呼ばれている。ノビレチンという成分には、血糖値や血圧を下げる働きがあり、糖尿病や高血圧のほか、発ガン抑制、痛風、慢性間接リウマチの予防などに効果があることが発見された。

生産量が多い野菜はサヤインゲン、ゴーヤー、レタスなど。沖縄独特の野菜ではゴーヤーのほか、シブイ（冬瓜）やナーベーラー（ヘチマ）などがある。特にゴーヤーはビタミンＣが豊富で夏ばて防止に良いとされ、最近は県外への出荷量も増加している。またパパイヤは沖縄ではフルーツではなく青い実を野菜として食することが多く、千切りにされたのが市場で売られている。

沖縄の畜産は養豚、肉牛、酪農、鶏卵、ブロイラーが主である。最近ではダチョウや山羊も目立ってきている。さて、全国一の豚肉消費量を誇る沖縄だが、どれほど消費されているのだろうか。沖縄県農林水産部畜産課が発表した資料によると、平成１１年度の県内消費量に対する生産量の自給率は１４５％である。昭和６０年以降、自給率を１３０～１４０％台とキープしているのだ。約２万４０００ｔを生産、生産量の約４５％は移出しているにもかかわらず、４０００ｔを輸入した約１万７０００ｔが県民の胃袋に納まっている。肉牛は７２％が県外出荷。実は、肉牛そのものよりも沖縄で生まれ育った子牛の売買が大きな産業なのである。子牛は肉質が良く、高級な牛肉として名高い松坂牛などにもなる。平成１２年には３万３０００頭の取引が行われたようだ。このほか、ヘルシーな肉として人気が高まりつつあるダチョウもヒナの頃、本土に出荷。山羊に関しては、沖縄では祝い事に欠かせない山羊汁の需要から飼育農家が増えつつあるようだ。

○建築

沖縄の建物は亜熱帯の強烈な陽射しを和らげて、台風の強風に耐えられるようになっている。自然の中から生まれた沖縄ならではの知恵と工夫がいかされている。

去る大戦を結節点に風景は一変、荒野の中から復興した街は、台風の脅威もありコンクリートの建物に替わっていた。アメリカの基地文化は建物にもミックスされ独特の混在風景が生まれた。１９６０年代には陸屋根の上に短い柱の角を出し、将来に備え２階増築の為の「希望の角」を準備したのである。その上、断水時のための水タンクも乗り、奇妙な建物が沖縄の風景のメジャーになる。それに比例して沖縄独特の木造赤瓦の家屋敷はかなり激減していく。昔ながらの低い石垣や防風林の屋敷囲いに直接通りから見えないように配慮された目隠しで、その奥に主屋があり、軒は雨ハジと呼ばれ強い陽射しと暴風雨を防ぐ役割を果たしているのが沖縄の風景でもあった。しかしながら、本土復帰と共に交通と情報文化は海を越え、建物にも変化を及ぼしていく。赤瓦の屋根に直接通りから見えないように配慮された目隠し、雨ハジの牧歌的なイメージから、風土と建築を据え直す表現が増え始める。今ではコンクリート建ての家でも、個性豊かな沖縄の風土にあった建物が街の風景を形づくっている。

近年木造赤瓦屋根は激減した。路地裏を散策してみると今でも古い民家を見つけることができる。強烈な陽射しの下の赤瓦は沖縄の風景にあっている。現在では、台風の影響や時代の流れによりコンクリートの建物が増えている。首里城の復元の際には大量の赤瓦が使われたが、沖縄最古の瓦は高麗瓦で、１１００年～１２００年代に沖縄で作られた説があり、その時代は黒っぽい瓦であったという。瓦は生産量の増加にともない焼成温度が低くなり、酸化焔による赤に変わっていた。当時は使用範囲も首里、那覇近郊に限られ、地方に広がったのは明治２２年以降のことである。最近では沖縄風景の象徴でもあった赤瓦や直接通りから見えないように配慮された目隠しも形を変えて、個性豊かなデザインがコンクリートの建物と合体し多彩なデザインとなり街の風景を楽しませている。

昔ながらの屋敷囲いは意思や木を塀にし、毎年襲来する台風をガードした。石垣の門の奥に表の塀を奥にずらして建てたような、ヒンプンと呼ばれる目隠しの衝立がある。道からの視線と台風を遮る役目を果たし、さらに悪霊を遮る役割も果たしているという。石垣の積み方には３種類あり、庶民の屋敷は石を加工せずに自然のまま積み上げる「野面積み」であり、今でも本島の田舎や離島で多く見られる。他に、布積み（長方形や正方形に加工し積み上げた石積み）は強烈な暴風雨から家を守るために人の目線よりも高くしたのである。有人島が４０を超える島々を持つ沖縄では、多種多様な住まい技法が至る所で見られる。最も、驚かされる島は「渡名喜島」である。２つのお椀のような山の間の砂地にある集落は、強烈な台風の通り道でもある。その台風から家を守るために、屋敷を丸ごと掘り下げ、家を建てたのである。軒先は表の路地から見ると目線よりも低く台風の抵抗を少なくしてある。島には屋敷を掘り下げるほど働き者だという言葉があるほどである。低い屋根の集落が見られる渡名喜の風景には風土の知恵を感じさせる。

昔ながらの屋敷囲いに見られるのが真っ直ぐ伸びた緑のフクギ並木である。低い野面積

みの石垣にフクギの組み合わせは絶妙である。本島の北部、本部町の備瀬集落は全てフクギの屋敷囲いであり、路地の両側に濃い緑の並木が連なり、家屋がほとんど見えないほどである。高さ１５ｍにもなる常緑樹は、毎年襲来する強烈な台風から家を守ってくれる大切な防風林である。楕円形で肉厚の葉っぱは強い陽射しを遮り、防火林としての役割も果たしている。木の足の下の幹の間からは涼しい風が通り抜けていく。樹皮から「黄色」の染料がとれ沖縄の織や染に利用されている。明るく原色の風景にマッチしたフクギは、沖縄の屋敷を守る強い味方なのである。

去る大戦で荒野と化した沖縄、戦前と戦後の風景は大きく異なる。戦後復興まもなく襲来した強烈なグロリア台風によって、コンクリート・ブロック造りの建物は増えつづけた。

米軍施設のコンクリート・ブロック建築の技術の流れもあり、瞬く間にコンクリート・ブロックの家は巷に広がっていった。６０年代にはわりと似かよった家が次々と建っていった。四角っぽい平面に陸屋根、少し突き出た庇、陸屋根の上には一階部分の柱の延長が１ｍほど角のように突き出て、何とも言えない奇妙な風景が数多く並び立っている。その角は将来、２階建てに増築する際に利用するのである。いわば独特の沖縄コンクリート建築文化といえる。やがてその柱は希望の角と言われるようになったのである。

沖縄の建物で少しかわったものといえばもうひとつある。それは墓である。沖縄の墓は本土の墓に比べて大きい。初めて見る人は、小さな家のようであるという。祖先崇拝の島では墓は大きくなり糸満にはさらに大きな門中墓もあり親戚縁者がひともとめに入るのである。毎年行われる清明祭は親戚が一堂に会し、お墓の前庭で先祖と一緒にご馳走をいただき祈願と親交を暖める。一般的に亀甲墓が良く見受けられ、亀の甲羅に似ているところからつけられたのであろう。１８世紀前後に伝わった歴史があるが、第二尚氏王統の陵である王陵のような破風墓は１５００年代であり亀甲墓の北限は伊平屋島であり南は台湾、ベトナムまで広がる。

４．　方言

沖縄方言は、先島地方（宮古、八重島、与那国）などの南琉球方言と沖縄本島地方や奄美地方の北琉球方言に大きく分けられる。日本語の中で本土方言と両極をなす。両方言の使用者の人口比率はおよそ１対１００であることを考えると、沖縄方言の重要性がわかる。沖縄方言では、隣村であっても方言の違いが散見される。

沖縄方言の一般的な母音変化は、ｅがｉに、ｏがｕに、ｕがｉに変化することである。

ｙome（嫁）→yumi（ユミ）
kome（米）→kumi（クミ）
kokoro（心）→kukuru（ククル）
mizu（水）→miji（ミジ）
suna（砂）→∫ina（シナ）

沖縄方言を話す環境にない人にとって、沖縄方言の発音の難しさの筆頭は、waa（豚）やyaa（第二人称）など、声門破裂音を語頭に伴う音であろう。この発音の難しさの極端な例がウチナーンチュの高校生である。彼らは年寄りやメディアを通してある程度沖縄方言にさらされているが、生活は標準語に支配されている。当然声門破裂音も出せず、waa「豚」がwaa「自分」になる。yaa「話し相手」はyaa「家」になってしまう。

沖縄の文化や伝統の根幹をなす方言の重要性を考えると、沖縄方言の話者である大人の責任は大きい。

沖縄方言の基本的な言葉とあいさつ

～現在はあまり使われなくなっています～

基本編

沖縄方言	意味
うちなーんちゅ	（一般に）沖縄の人
いぇーまんちゅ	八重山の人
なーくんちゅ	宮古の人
やまとぅんちゅ	沖縄県外の日本人
わん	私
わったー	私たち
うんじゅ	あなた
ぃやー	おまえ
うきみそーちー	おはようございます
ちゅぅうがなびら	こんにちわ
ちゃーびらさい	ごめんください
めんそーれー	いらっしゃいませ
うさがみそーれー	召し上がれ
くわっちーさびら	いただきます
くわっちーさびたん	ごちそうさまでした
いみそーれー	お入りください
にふぇーでーびる	ありがとうございます
はじみてぃやーさい	はじめまして
んじちゃーびら	さようなら

会話編

日本語	沖縄方言
ここはどこですか？	くまーまーやいびーが？
今何時ですか？	なまー何時なとーいびーが？
これは何ですか？	うれーぬーやいびーが？
いくらですか？	ちゃっさやいびーが？
ここから〇〇へはどの位時間がかかりますか？	うまから〇〇までーちゃぬあたいかかいびーが？
この通りは何というのです？	くぬみちぇーぬーんでぃいちょいびーが？
〇〇に行きたいのですが。	〇〇んかいいちぶさしが。
〇〇へはこの道から行けますか？	〇〇んかいやくぬ道からるいちゃびーりぃ？
もう一度言って下さい。	なぁちゅけーんいちくぃみそーれー。
もっとゆっくり話してください。	なぁふぃんよーんなぁいちくぃみそーれー
紙に書いて下さい。	かびんかいかちくぃみそーれー。
はい、お願いします。	うー、うにげーさびら。
いいえ、結構です。	うーぅぅん、ゆたさいびーん。
困ったことがあります。	しわぐとぅぬあいびーん。
道に迷ってしまいました。	みちんかいまゆとーやびーん。
財布を盗まれました。	財布盗まってぃねーやびらん。
警察を呼んで下さい。	きーさちゆでぃくぃみそーれー

５．　沖縄の自然

日本で唯一、亜熱帯気候に属する沖縄。青い海・青い空はもちろんやんばるの森や西表島の原生林など緑豊かな山の風景も独特なものである。また、イリオモテヤマネコやヤンバルクイナなど他では見られない多数の国有種の動植物が生息し、そのゆたかな自然を生かしたビーチやキャンプ場も点在している。

沖縄は島々によって表情が違う。古都・首里や緑の山々が連なるやんばるの森がある沖縄本島。さんご礁に囲まれた慶良間諸島、文化の香り漂う久米島、海が綺麗な宮古島、緑と青い海が美しい八重島諸島など、島ごとに違う風景文化がある。

○ 島々の風景文化

●沖縄本島

① 首里金城町の石畳

１６世紀初頭、琉球王朝の尚真王の時代に整備された琉球石灰岩製の石畳道路である。かつては真珠道と呼ばれる主要道路の一部として利用された。道路は那覇港や南部地域まで通じており、総距離は焼く１０ｋｍにもおよんだ。そのうち現在でも約２８０ｍが残され、付近の石垣と赤瓦屋根の家並みとともに首里の都であった当時の雰囲気が感じ取れるような場所である。県指定の名勝である。

② 喜屋武岬

沖縄本島の最南端エリアに位置する断崖絶壁の岬である。この一帯は太平洋戦争末期の沖縄戦の地でもあり、岬の突端には戦争犠牲者の鎮魂と永久平和の願いをこめた平和の塔が建立されている。

③ 瀬長島

那覇空港近くに浮かぶ周囲１．５ｋｍの小さな島である。本島からは海中道路でつながっていて、自由に自動車などで行き来ができる。空港から爆音とともに飛び立つ航空機や着陸態勢に入った様子など間近に見ることができる。

④ 知念城跡

王国時代より前の１２～１４世紀かそれ以前時代に造られたとされる城で知念森とも呼ばれる。城は野面積み城壁の古城部分と、切り石いかた積み城壁と石造りのアーチ型正門・裏門がある新城部分に古謡『おもろそうし』にもうたわれているほか、沖縄開祖の祖神アマミキヨが住んだとされる１４箇所の霊地を巡る「東御廻り」の拝所でもある。国指定史跡である。

⑤ 具志川城跡

糸満市喜屋武岬の断崖上にあり、２つの郭で形成されている城である。久米島の具志川城を追われた真金声按司が、この場所に故郷と同じような城を築いたという伝承が残る。三方を海で囲まれ、海に沿った野面積みと城門の切り石積みが特徴。保存状態も良いの

で、その当時の雰囲気をそのまま感じることができる。また、城内には海へ通じている「火吹き穴」と称される自然洞窟がある。国指定史跡である。

⑥ 残波岬

読谷村の半島から東シナ海へ突き出た岬。北側に急崖、南側は暖斜面になっている。北側の断崖絶壁では波があたり水しぶきをあげる猛々しい景観が楽しめる。

⑦ 海中道路

沖縄本島中部の与勝半島、与那城町屋慶名と平安座島を結ぶ長さ約５ｋｍの道路である。道路は平安座島に石油貯蔵基地を持つ石油会社から譲り受けたもので、１９７１年に開通し、近年さらに整備が進められ現在の形になった。平安座島からはさらに宮城島、伊計島や浜比嘉島へ行くことができる。

⑧ 伊計島

沖縄本島から海中道路、平安座島、宮城島、伊計大橋を経由して行くことができる周囲約７ｋｍの平坦な島である。縦穴式住居が復元された国指定史跡の「仲原遺跡」もある。

⑨ 浜比嘉島

平安座島から本島では最長、県内でも３番目となる全長１４３０ｍの「浜比嘉大橋」を渡って行くことができる周囲７ｋｍの島。赤瓦屋根の集落が広がる昔ながらの素朴な空気が流れる。島内には出世の神である地頭代火の神を祀った祠や沖縄の祖神アマミキヨとシネリキヨの２神を合祀したものといわれる。「シルミチュー霊場」があるなど神秘的な一面もある。

⑩ 万座毛

琉球石灰岩の切りたった断崖と、芝生の広場の景色で知られる景勝地である。尚敬王が北山巡視の際にここを訪れ、その景色に感動し「万人が座するに足る野原」という意味で「万座毛」と名付けられたという。また、王一行を歓迎する気持ちを込め、即興で歌をうたったという女流歌人の恩納ナビの歌碑も建てられている。一帯の植生は珍しい万座毛石灰岩植物群落として県の天然記念物に指定されている。

⑪ 安慶名城跡

１４世紀ごろ安慶名大川按司によって築かれたとされ、「大川グスク」とも呼ばれる。自然の断崖と急斜面を利用し、山頂を取り囲む形で造られた輪郭型の山城。切り石積みで巧みに組まれた石垣が巡らされ、高いところでは約１０ｍにも及ぶ。城内は公園としても整備されているほか、近くには具志川市営の闘牛場もある。国指定重要文化財である。

⑫ 山原の森

沖縄本島北部は山原（＝ヤンバル）と呼ばれ、自然そのままの姿を残している。特に国頭村には本島で最も高い標高５０３ｍの与那覇岳などいくつもの山々が連なり、天然記念物「ヤンバルクイナ」や「ノグチゲラ」などの貴重な生物が生息する場となっている。

⑬ 備瀬集落

本部町の「国営沖縄記念公園」近くにある集落である。高さ約１５ｍの常緑の高木で、古くから暴風・防潮林や屋敷林として植栽されてきたフクギが多く残され「備瀬のフクギ並木」と呼ばれる。かつてはほとんどの集落で見られたフクギ並木だが、現在ではその数も減少。ソテツ群落や貝塚でも知られる。

⑭ 茅打バンタ

国頭村の辺戸岬手前にある高さ約８０ｍの切り立った断崖である。「バンタ」とは方言で突出した崖のことで、そこから束ねた茅を投げ込むと強い上昇風でバラバラに舞い上げられることが名称の由来である。「茅吹き」がなまって「茅打ち」という呼び方になったとされる。展望台からは東シナ海のサンゴ礁やヤンバルの山々の景色が見渡せる。崖下には本島内最長となる全長１０４５ｍの「宜名真トンネル」がある。

⑮ 辺戸岬

沖縄本島の最北端となる岬、沖縄の本土復帰にまつわる祖国復帰闘争記念碑も建てられている。

⑯ タナガーグムイの植物群落

国頭村の普久川近くの淀みのひとつ。方言で「タナガー」はテナガエビ、「グムイ」は淀みのこと。常に低温で湿った状態のため特殊な植物群落を形成。「リュウキュウアワビ」や「アオヤギソウ」、「コケタンポポ」など希少な植物をはじめ日本最大のテナガエビデある「コンジンテナガエビ」などが観察できる。国指定天然記念物である。

⑰ 慶佐次のマングローブ

東村の慶佐次河口から上流に向かって発達している本島内では最大規模のマングローブ林で国の天然記念物にもしていされている。「メヒルギ」、「オヒルギ」などからなり、中でも「ヤエヤマヒルギ」は生息の北限。展望台や遊歩道が整備され気軽に林の様子が観察できる。「サキシマスオウノキ」や「サガリバナ」など珍しい植物も成る。

●伊江島

① 城山

伊江島のほぼ中央部にそびえる標高１７２ｍの突起状の丘である。「伊江島タッチュー」と呼ばれ、島を象徴するような存在である。守り神としての信仰も集めている。頂上からは沖縄本島の恩納村や国頭村の山々までが見渡せ、かつては航海の目印でもあった。新しい岩盤の上に古い岩盤が乗っているという世界中でも類を見ない珍しい現象も確認されている。国有種「イエジマチャセンシダ」の生息地でもある。

●慶良間諸島

① 渡嘉敷島

大小２０あまりの島々が点在する慶良間諸島の中でも最大で、周囲約２８ｋｍ。阿波連、渡嘉敷、渡嘉志久の３集落からなる。きれいな弓形を描いている。

② 安室島

座間味島のすぐ南側に浮かぶ周囲約５ｋｍの小さな無人島である。多彩な種類の熱帯魚

が観察できる通称「安室魚礁」や直径１．５ｍにも及ぶ巨大なテーブルサンゴが見られる通称「安室牛瀬」などがある。通常、島まで行くためには船を利用することになるが、干潮時には座間味島から徒歩で移動することも可能である。

③　座間味島

渡嘉敷島の北西に浮かぶ周囲約２５ｋｍの島である。座間味、阿真、阿佐の３集落からなり、渡嘉敷島同様にきれいな海に囲まれている。

●久米島

①　比屋定バンタ

島東部の仲里村、比屋定集落から阿嘉集落にいたる断崖である。その高さは２００ｍにも及ぶ。展望台からは崖下の珊瑚礁や「はての浜」、そして慶良間諸島まで望むことができる。

②　畳石

久米島から奥武島海中道路を渡って行く奥武島の南海岸に分布する発達した安山岩溶岩である。溶岩が冷えて固まる時、波などの浸食を受けて形成された割れ目で、五角形や六角形など幾何学模様が亀の甲羅のように一面に広がっている。その個数は千以上ともいわれ、不思議な光景である。引き潮の際にその姿がはっきりと確認でき、またその上を実際に歩いてみることも可能である。

③　五枝の松

島西部の具志川村にある高さ約６ｍ、幹回り約５ｍの樹齢２５０年以上にもなりリュウキュウマツである。上へ向かって伸び、高さも２５ｍほどにもなる一般的なマツとは違い、根元から約１２ｍが地面を這うように横に伸びているのが特徴である。人の手が加えられたような不思議な姿は「巨大な盆栽」とも例えられ、日本の名松１００選にも選定された。国指定の天然記念物にもなっている。周辺にはクメジマボタルが生息している。

④　宇根の大ソテツ

仲里村宇根集落の「喜久村家」の庭園内に成育している樹齢２５０年以上になるという巨大なソテツである。高さ６ｍと４ｍの２株に分かれ、そこからさらに約２００もの枝に分かれるなど迫力ある姿が観察できる。２～３ｍの高さが通常のソテツだが、植栽されてからの保護や育成などが丁寧にされるなど、よい環境で育ったため、ここまでの大きさになったようだ。県指定の天然記念物にもなっている

⑤　ミーフーガー

島北西部、具志川村の「具志川城跡」北側の海岸にせりだしている岩壁に穴が大きく貫通している場所である。「ミーフーガー」の原義は「穴あき銭」という意味といわれる。古くから具志川村と仲里村の境界でもあり「とうし」と呼ばれていたという記録も残されている。また、その穴の形状から、女性性器に見立てた俗説も語られているが、比較的新しい時代に作られた話であるという。

⑥　はての浜

久米島の南東、奥武島沖に浮かぶ砂の島である。真っ白い砂浜が約７ｋｍ続く細長い形状で、波も穏やかである。「はての浜」まではボートで約２０分の距離にある。

⑦　具志川城跡

島北西部の海岸近くの琉球石灰岩丘陵上にある城跡である。南東側の城門付近以外は断崖になっている。城壁は琉球石灰岩と輝石安山岩を使用した切り石積みで、３つの郭からなっている。１４世紀ごろ真タフツ按司によって築かれたとされるが、はっきりとしていない。築城以前から「真玉橋ソノヒヤブ」、「サキマ森カナヒヤブ」、「タツヒヤク」の３神が祀られていて、現在でも重要な祭礼場でもある。国指定史跡である。

⑧　熱帯魚の家

比屋定集落に広がるサトウキビ畑を通り抜けて行く海岸にある。潮溜まりになった場所があり、そこの中で色とりどりの南国らしい熱帯魚が泳いでいる。

⑨　上江州家

具志川城主の子孫で、代々地頭を勤めた上恵州家の住居で、１８世紀に建てられた沖縄県では最古の民家である。一番座に床と神棚が設けられるなど伝統的な沖縄の間取りで作られている。石垣、井戸、豚舎のほかにも尚敬王から贈られたという額なども残され、当時の生活ぶりを垣間見ることができる。内外にはフクギやイヌマキなどが生い茂っている。別名「石垣殿内」とも呼ばれる。国指定重要文化財である。

●宮古島

①　東平安名岬

島の東端、城辺町に位置している。太平洋と東シナ海を分けるように細長い約２ｋｍの岬が突き出ている景観で、宮古島を代表する名所である。悲恋伝説が残る絶世の美女であった「マムヤの墓」もある。潮風が吹き付ける過酷な条件下に２２２種の植物が確認されていて、学術的にも貴重な場所でもある。

②　砂山ビーチ

珊瑚礁が砕かれてできたきめの細かいパウダーサンドの小高い砂丘をこえたさきにあるビーチである。波に浸食され、アーチ型を描いている隆起珊瑚礁の洞窟がある。

〈伊良部島・下地島〉

③　池間大橋

西平安名岬からのびる全長１４２５ｍの橋で、宮古島と池間島を結んでいる。橋のたもと周辺には風力発電のための風車もある。池間島に向かって右側には立ち入り禁止の聖地が多くあるため神々の棲む島と呼ばれる「大神島」のシルエットも望むことができる。池間島は周囲１０ｋｍの島である。

④　通り池

下地島の北西海岸近くにあり、隣接する２つの池の総称である。水深３０～４０ｍで海に通じていて、潮の満干により水位の変化が見られる。その不思議な地形である。また、

神秘的な雰囲気のためか、島を襲った津波に乗り海へ帰って行ったという「人魚伝説」や実子と継子を取り違えて殺害してしまったという「継子殺し伝説」などが伝えられている。県の天然記念物である。

⑤ 来間島

宮古島の南西にある周囲約６．５ｋｍの円形の島。「屋敷内の庭にブーゲンビリアの花を１本以上植える」というユニークな「来間島憲法」と呼ばれる決まりがある。宮古島とは農道橋としては日本最長となる全長１６９０ｍの「来間大橋」で結ばれている。

●石垣島

① ヤエヤマヤシ群落

ヤエヤマヤシはヤシ科の一属一種の植物で石垣島と西表島のみで育成する国有種である。高さは２５ｍにもなる高木で、羽上の葉を広げた姿が南国らしさにあふれている。石垣島では国指定の天然記念物ともなっている。「米原のヤエヤマヤシ集落」が有名である。於茂登岳のふもとに広がっていて、群落内まで遊歩道も設置されている。近年、台風の被害も多少あったものの、よい保存状態で残されている。

② 平久保崎

白い灯台と芝生が広がる石垣島の最北端に突き出た半島である。いくつも連なった小高い丘が点在し、その周辺には放牧されている牛の姿が見える。また、平久保集落の近くにある山当山ふもとには、国内では石垣島だけに自生するという希少植物で国指定の天然記念物でもある「ヤエヤマシタン」が観察できる。

③ 川平湾

白い砂浜と湾内に浮かんだいくつもの小島や天候や気温など様々な要因でその海が七色に変化するといわれる景色で知られる。波の流れが速いため遊泳は禁止となっている。近くにはガジュマルの木が生い茂っている。また、黒真珠の養殖地でも有名である。

④ 御神崎

石垣島の北西部、北の低地湾と南の名蔵湾にはさまれた屋良部半島にある岬である。４～５月にはテッポウユリが咲き誇り、華やいだ景観が広がる。

⑤ バンナ岳森林公園

石垣市街の北にある標高２３０ｍのバンナ岳を中心とした公園である。山中にある「セイシカの橋」という吊り橋からはこの一帯に自生し『幻の花』ともいわれる「セイシカ」が３～５月にかけて薄紫の花を咲かせている様子が見られる。

⑥ 宮良殿内

石垣市街にある国指定文化財である。１９世紀に八重山頭職を務めていた宮良親雲上当演が建造した武家屋敷で、木造平屋建てで琉球石灰岩の石を庭園に配置するなど首里貴族の屋敷をまねて造ったとされる。当時は階級や制度によって住宅の規範があり、この屋敷はそれに違反していると、王府から度重なる取り壊しを命じられていたが、それに応じることなく現在まで残ることとなった。国指定重要文化財である。

〈竹富島〉

⑦　伝統的建造物群保存地区

石垣島の西方約６ｋｍに浮かぶ周囲９ｋｍの小さな竹富島は、島全体が国の重要伝統保存地区に指定されている。真っ白な砂が敷き詰められた路地や、珊瑚の石垣に囲まれた赤瓦屋根の民家が連なり、昔ながらの沖縄の風景を今に残している。同島に伝わる古くからの祭り「種子取」も国指定の民族文化財になっている。

●西表島

①　仲間川

西表島のやや中央の山地を源流に東部の大原港に流れる「仲間川」である。川幅が２００ｍを超えるところもある。沿岸には日本最大規模の「マングローブ林」や「ヤエヤマヤシ」、「サキシマスオウノキ」の群落が広がる。周辺は天然記念物「イリオモテヤマネコ」の生息地でもある。

②　浦内川

仲間川同様に島中央から西北に流れ東シナ海に注ぐ約３９ｋｍの県下最大の川である。川幅が５００ｍに達するところもある。両側にはうっそうとしたマングローブ林が広がる。

③　マリユドゥの滝

幅約２０ｍ、落差１６ｍの滝が３段に流れ落ちる滝である。「マリユドゥ」とは「丸い淀み」という意味である。また、日本の滝１００選にも制定されている。

④　原生林

西表島は沖縄本島に続く２番目に大きな島で、その約９０％近くが亜熱帯の原生林、島の１／３が西表国立公園に指定されている。「ヤエマヤシ」や「ニッパヤシ」など国指定天然記念物や高さ１０ｍにもなる「ヒカゲヘゴ」などが生い茂り、ジャングルの様相を呈している。「イリオモテヤマネコ」、「セマルハコガメ」などの希少生物、「サキシマカナヘビ」など島固有種の生物も多く生息する。

⑤　カンピレーの滝

「マリユドゥの滝」からさらに奥にある。西表島の１５ヵ所の神々が集まり、島づくりのための話し合いが行われたという伝説が残る聖地で、「神々が座するところ」という意味を持つ。幅広の滝は緩やかに段を刻みながら流れるため、一見急流のようである。滝付近のポットホールと呼ばれる丸い穴にはヤゴ等の水棲動物もいる。

●波照間島

①　日本最南端の碑

石垣島の南西４３ｋｍに浮かぶ波照間島は有人島としての国内最南端の島となり、その先にあるのは遠くフィリピン諸島である。この碑は１９７２年（昭和４７年）の沖縄本土復帰を記念して建てられた。また離れることないようにとの願いを込めた絡まりあう２匹の蛇のオブジェや各都道府県から集められた小石などもある。終戦５０周年を記念

した「日本最南端平和の碑」も隣に建っている。

② 高那崎

東南端にある高さ約１０ｍほどの断層が続く断崖絶壁である。ここに「日本最南端の碑」があることから分かるように有人島としては国内最南端に位置する。太平洋の激しい波がごつごつとした岩肌に打ちつけ、迫力ある勇壮な光景が広がる。

●与那国島

① 東崎

与那国島の東端に位置し、灯台や展望台などが設置されたのどかな牧草地である。草原が発達していることから、ここでは１年中、与那国島の在来種でやや小型の「ヨナグニウマ」や水牛が放牧されている。

② 西崎日本最西端の碑

石垣島から約１２０ｋｍの距離にある与那国島は、台湾まで１１１ｋｍという日本最西端の島である。西端の西崎には「最西端の碑」が建てられている。島に生息する天然記念物で世界最大の蛾「ヨナグニサン」をかたどった展望台がある。

③ ティンダハナタ

祖内集落の南西にある隆起珊瑚礁でできた断崖で、「ティンダバナ」という呼び方もする。標高約１００ｍで自然の展望台となっている。侵食洞窟や湧き水など変化にとんだ地形が続く。

④ 久部良バリ

島西部の久部良漁港から少し東へ行った高台に黒い岩肌が広がる「久部良フリイシ」という場所がある。「久部良バリ」とは奇怪な形をした巨岩が転がるその一角にある幅３．５ｍ、深さ７ｍの裂け目のことである。１７世紀ごろ、首里王府による重い人頭税のため貧困に陥った島民が島中の妊婦にこの裂け目を飛び越えさせ、ロベらしを行っていた。落ちれば死に、飛び越えても流産する例が多かったという。

④ 立神岩

島の南東に位置する与那国島のシンボル的な岩である。三方向を断崖に囲まれ、荒々しい波に耐えながら神々しくそそり立つ姿で知られる。古くは「頓岩」という名で呼ばれていた。岩の上に海鳥の卵を取りに登った青年が降りられなくなって疲労と非嘆の末、眠ってしまうが、起きてみるといつの間にか陸地にいたという奇妙な岩にまつわる伝説も残されている。

⑤ サンニヌ台と軍艦岩

断崖が続き巨大な岩がオブジェのように並んでいる島東部にある。中でも知られているのがこの二つ。太平洋の荒波に浸食されるなどして岩盤が直角に切り取られ、階段状になっているのが「サンニヌ台」で、広大なステージのような姿になっている。沖合に停泊している軍艦をイメージさせるのが「軍艦岩」。両方とも自然が作り上げたスケールの大きなもので、神秘的な雰囲気さえ漂う。

○ 沖縄の動植物

沖縄県内は世界的にも注目を集める珍しい動植物が多く、学術的にも価値の高い自然の宝庫である。天然記念物や絶滅の危機のおそれのある動植物もまた多い。

★動物

名称	生息地
ノグチゲラ	沖縄島北部のやんばる地域にだけ生息。
カンムリワシ	石垣島や西表島に生息。
オカヤドカリ	海岸近くの岩場やマングローブ林などに多く生息。
イリオモテヤマネコ	西表だけに生息。
アカヒゲ	男女群島や薩南諸島から沖縄諸島、八重山諸島に生息。
カラスバト	与那国島に生息。
ジュゴン	沖縄島辺野古沿岸で多数の目撃例。
オキナワトゲネズミ	沖縄島北部のイタジイ林にだけ生息。
リュウキュウキンバト	八重山諸島と宮古島に生息。
ケナガネズミ	沖縄島、徳之島、奄美大島だけに生息。
セマルハコガメ	石垣島と西表島だけに生息。
ダイトウオオコウモリ	南北大東島だけに生息。
キシノウエトカゲ	宮古諸島や八重山諸島のほとんどの島に生息。
ヤンバルクイナ	沖縄島北部のやんばる地域だけに生息。
ケラマジカ	慶良間諸島に生息。
リュウキュウヤマガメ	沖縄島、渡嘉敷島、久米島だけに生息。
ヤンバルテナガコガネ	世界中で沖縄島北部の森林だけに生息。
フタオチョウ	沖縄島北部だけに分布する国有亜種。
コノハチョウ	沖縄島、石垣島、西表島に分布する国有亜種。森林やその周辺地に生息。
クロイワトカゲモドキ	沖縄諸島に生息。
キクザトサワヘビ	久米島だけに生息。
イボイモリ	沖縄島、瀬底島、渡嘉敷島、徳之島、奄美大島だけに生息。
ヨナグニサン	与那国島に生息。
ホルストガエル	沖縄島北部と渡嘉敷島のみに生息。
ナミエガエル	沖縄島の北部地域の山地渓流のみに生息。
アマミヤマシギ	奄美大島、徳之島、沖縄島、久米島、渡嘉敷島に生息。
ヤシガニ	琉球列島の島々に生息。
イシカワガエル	苔むした岩場に生息。

クメジマボタル	久米島だけに生息。
ハブ	沖縄諸島や奄美諸島に生息。
ヨナグニウマ	与那国島の在来馬。
キノボリトカゲ	奄美諸島と沖縄諸島に生息。
ホオグロヤモリ	徳之島以南、琉球列島各地に分布。

★植物

名称	
ガジュマル	熱帯から琉球列島に広く分布。
サキシマスオウノキ	琉球列島の海岸地帯やマングローブ林の近くに多く生える。
フクギ	昔から防風や防火の目的で屋敷の周りに植えられている。
アダン	県内各島に広く分布。
オオハマボウ	沖縄各島の海岸や河川沿いに広く生育する。
センダン	沖縄では各地で見られる。自然分布かどうかは不明確。
デイゴ	インド原産。インド洋から島々に広く分布。
オキナワウラジロガシ	国頭村の伊部岳山麓には、日本一のオキナワウラジロガシが生育。
イジュ	奄美諸島や沖縄諸島、八重山各諸島に生育。
イタジイ	沖縄島や西表島の山地で最も多く生えている。
ヒカンザクラ	県内唯一の自生地。
バショウ	国道沿いや農地などに多くのリュウキュウバショウが栽培されている。
モンパノキ	沖縄各島に成育。
ビロウ	昔から神木として御嶽内によく植えられている樹木。
テッポウユリ	琉球列島が原産地。

６．　食文化

琉球王国として海外との交易を行い海外の文化を積極的に取り入れた沖縄。食文化も中国や日本、韓国、東南アジアなどの各国の影響を受け亜熱帯気候ならではの食材を使った沖縄独自の調理法や料理が生まれた。戦後は南米などの移民帰りやアメリカの影響を受け、牛肉や缶詰など新しい味の料理を取り入れ、新しい沖縄の味として定着している料理も多い。

沖縄の庶民料理は、沖縄各地の庶民の家庭の中で地域地域の工夫を加えながら発達してきた。また那覇では、辻町を中心に宮廷料理の技術を取り入れ ながら接待料理としての辻料理が、那覇の繁栄する港町を背景にして独自の発達を遂げた。那覇の庶民料理が発達した要因として次の事が考えられる。

(1)地方経済の中心であったこと。

(2)海や山の幸の集約する貿易の中心地であったこと。

(3)薩摩在番奉行所が置かれていたため、役人の接待用に高度な料理が要求されたこと。

(4)久米村と辻の遊郭という二つの特色ある地域の影響を受けたことなどである。

＊沖縄の食材＊

★豚肉【沖縄のご馳走といえばなんといっても豚肉である。「泣き声以外はすべて食べ尽くす」といわれるほど多彩な豚肉料理がある。】

- テビチ･･･豚足。チマグーともいう。
- ミミガー･･･読んでそのまま耳の皮である。
- 三枚肉･･･いわゆるバラ肉の部分である。
- ソーキ肉･･･豚のアバラ肉。すなわちスペアリブである。
- 中身･･･胃袋、大腸、小腸などのモツ類。
- チラガー･･･豚の面の皮。
- チム･･･豚の肝臓のこと。

★野菜【強烈な南国の陽射しのもとで育った沖縄野菜は栄養が豊富である。その種類も多種多様で、本土では見られない種類も多い。料理法も野菜の栄養素を逃がさないよう工夫したものが多い。沖縄の長寿を支える代表的なものだ。】

- ゴーヤー･･･ビタミンＣやミネラルが豊富で暑い沖縄になくてはならない野菜。
- パパイヤ･･･沖縄では果物というより熟す前のパパイヤを野菜として利用するのが一般的。
- ターンム（田芋）･･･沖縄特産の田んぼで栽培する水芋の一種。
- チデークニ･･･「島ニンジン」ともいう。カロチンやビタミンが豊富。
- ナーベーラー･･･本土では垢擦りとしてしか使われないナーベーラー（ヘチマ）も、沖縄では代表的な夏野菜である。

・ フーチバー･･･よもぎのことである。沖縄県内では庭先や原っぱなどに自生している。
・ ハンダマ･･･水前寺菜ともいい、葉の表は緑、裏側が赤紫のキク科の野菜。
・ ンージャナバー･･･ニガナ（苦菜）とも呼ばれ、もともとは沖縄全域に自生する野草である。
・ ウンチェーバー･･･和名はようさい。サツマイモと同じ科の仲間で鉄分、カルシウムをはじめビタミンを多く含んでいる。
・ イーチョーバー･･･ういきょうのこと。整腸の薬として葉の絞り汁や煎じ汁を飲用することも多い。
・ チョーメーグサ･･･せり科の野草で沖縄ではこれを食べると長生きすると言われている。

★魚【沖縄の魚料理は、唐揚、酢味噌和え、汁物など内地ではあまりみられない料理法が多い。】

沖縄近海でとれる魚は熱帯圏と同様、極彩色のカラフルなものが一般的である。文字通りの熱帯魚だ。そのため、こんなのが食べられるのかと兢々としてしまう観光客が多いようだ。

確かに脂ののった魚は少なく、全般的にぱさぱさしているので、そのまま塩焼きにしたり煮魚にするといった日本料理的な調理法で食べる習慣はいまでもほとんどない。また、冷蔵技術の発達していなかった昔は刺身にして食べるにも酢をあしらったり、酢味噌で合えるのが伝統的な食べ方だった。

この少ない脂分を補うと同時に、保存性を高めるためにとらえたのが、油で唐揚にするという調理法である。その代表的な料理が県魚にも指定されているグルクン（和名：たかさご）の唐揚である。白身の淡白な味の魚だが、油で揚げることによって香ばしい一品に仕上がるという。

刺身にして食べる代表的な魚はイラブチャー（和名：ブダイ）である。珊瑚礁域を住処にしている原色の色鮮やかな魚で、ワサビ醤油でも食べるが、沖縄の人は酢味噌和えが定番である。タマン（和名：ハマフエフキ）、ミーバイ（和名：キビレハタ）、シチューマチ（和名：アオダイ）、アカマチ（和名：ハマダイ）などの白身の魚も刺身向きの魚だ。

この他、沖縄独特の魚の料理法にマース煮がある。これは塩と酒、水だけで煮る料理である。本土の潮汁に似ているが、沖縄では煮込むときに豆腐を入れるのが一般的である。

沖縄料理は、豚肉と野菜、豆腐などが中心である。また、乾物の利用も多い。こうした材料をチャンプルー（混ぜあわせ）する。調理法は、野菜の特徴によって、

- 炒める（チャンプルー）
- 炒め煮（イリチー）
- 煮込む（ンブシー）

など変化するのである。

沖縄の代表的な料理といえばゴーヤーチャンプルーである。ゴーヤーは野菜の中でもビタミンＣがとびぬけて多く、しかも熱を加えてもビタミンＣが壊れない健康野菜といわれ

ている。

各家庭によってチャンプルーの具は微妙に違う。豚肉やポークの缶詰が入ったり、もやしやにら、たまねぎ、にんじんといろいろな野菜がチャンプルーして入り、また、かつおぶしを入れずに化学調味料を入れたりもする。しかし、どこの家のゴーヤーチャンプルーにも入っているのが豆腐である。沖縄の豆腐は本土より大きくて固めの木綿豆腐である。

沖縄以外では、なかなか手に入らないので、代用は生揚げや焼き豆腐、木綿豆腐を堅く絞って使うと良いという。

その他にもナーベーラーンブシー（味噌煮）、ソーミンチャンプルー、テビチ（豚足）汁、沖縄そばクーブ（昆布）イリチー、イナムドゥチ、フーチバージューシー（よもぎの炊き込みごはん）、ラフテー（沖縄風角煮）など沖縄独特の料理がある。

★熱帯果実【沖縄では在来種はもちろん世界中の熱帯果実が栽培されており、形、味覚ともに不思議なものばかりである。】

- マンゴー･･･インド原産の熱帯果樹で、沖縄でもここ１０年ほどで栽培農家が増えつづけている。
- 島バナナ･･･民家の庭先や畑の片隅など、いたるところに植えられている。
- ドラゴンフルーツ･･･赤、黄色といった色鮮やかな果皮が美しい果物。サボテンの仲間で果肉は赤と白がある。名前の由来は形や色が龍の目に似ているところからである。
- パッションフルーツ･･･沖縄でよく取れる果物で鶏の卵ほどの大きさ。
- パイナップル･･･沖縄でパイナップルの栽培が始まったのは２０世紀初頭。一年中食べることができるが、特に７月から８月にかけてのものは甘味が強いという。

★その他の食材【豆腐は昔ながらの製法を頑なに守り、伝統の味を今に受け継いでいる。また、沖縄では採れない昆布なども食べる食材として、利用されている。沖縄料理の食材は全てヘルシーである。】

- イラブー･･･エラブウミヘビのこと。沖縄では薫製にして強精料理として汁物の具にして食べられる。かつての琉球王朝時代でも最高級の食材で、王族や上層階級の人に珍重された。
- 豆腐･･･島豆腐は一丁が本土の豆腐の４倍もある。水分が少ないのでずっしりと重く味も濃いのが特徴。
- 昆布･･･沖縄の昆布消費量は全国でもトップである。その利用もだしとして使うのではなく、野菜感覚で食べるのが普通である。ミネラルやヨード分が豊富で、豚肉や豆腐との相性や栄養バランスがよい。
- ポーク缶詰･･･戦後、米軍によって持ち込まれたポークランチョンミートの缶詰のこと。日本に輸入されるポーク缶詰のほとんどが沖縄で消費されている。

★調味料・香辛料【沖縄の料理には沖縄の調味料や香辛料は欠かすことが出来ない。】

- 島マース･･･沖縄近海の海水から造られた島マース（塩）沖縄には１０社以上の製塩所があり、中にはミネラルの含有量がギネスに認定される塩もある。

- 鰹節･･･沖縄料理というとだしは豚肉や豚骨だけというようなイメージがあるが、実は鰹節を使った料理が多い。豚だしと合わせることで旨味が２倍にも３倍にもなり、沖縄料理の味の基本になっている。
- コーレーグース･･･唐辛子を泡盛に漬け込んだ香辛料で、沖縄そばを始めとするさまざまな料理に使える万能香辛料である。
- フィハツ･･･ヒハツモドキというコショウ科の植物。主に八重山などで自生しており、フィハツの実を煎って粉にしてコショウのように使う

★お菓子・甘味【琉球王朝の時代から親しまれている沖縄の伝統お菓子は、中国の影響を受け、名前が中国風なものが多い。一方、庶民の日常生活の中から生まれたお菓子は黒糖を使ったものが多い。】

- ポーポー･･･中国の正月料理が原型。
- 黒糖･･･サトウキビを絞って煮詰め、石灰分を加えたのが黒糖。カルシウムや鉄分、ミネラルなど大地が育んだ自然の栄養分を豊富に含んでいる。
- ぜんざい･･･沖縄のぜんざいは本土と違い、甘く煮込んだ金時豆の上に、カキ氷をのせたものである。
- のーまんじゅう･･･首里の儀保まんじゅうのことだが、食紅で「の」と一筆書きされていることから「のーまんじゅう」と呼ばれている。
- サーターアンダギー･･･サーターアンダギーとは「砂糖を揚げたもの」という意味である。
- ちんすこう･･･中国の影響を受けたお菓子でかつては琉球王国の王族や貴族だけしか口にできなかった。
- 山城まんじゅう･･･「やまぐしくまんじゅう」と読む。１００年以上の歴史があるお菓子で、首里を代表する名物といわれている。
- タンナファクルー･･･名前の由来は首里の玉那覇さんが考案した黒いお菓子からきている。
- 塩せんべい･･･せんべいといっても原料は米ではなく、小麦粉を使ったお菓子。

７．　あとがき

この論文を通じて、沖縄のあらゆることがわかった。沖縄は青い海、緑豊かな自然に囲まれている。本土では見ることのできないたくさんの国有種の動植物が生息している。もちろん観光地として栄えているが、それ以上にたくさんの困難をしいられてきた。太平洋戦争では日本で唯一上陸された土地でもあり、防空壕が今でも数多く残っている。中は蒸し暑く真っ暗で足元もおぼつかないほどである。戦時中この中でたくさんの人がなくなったと思うととても悲しい思いになる。今でも米軍基地が沖縄の半分以上の土地を占めている。それにともない米軍が犯したたくさんの事件も起こっている。沖縄県民は常に危険と隣り合わせになっているといってもいいくらいだ。

沖縄は同じ日本でもどこか違う。いろいろな国の文化を融合させた独特の文化だ。それは食文化、建築物あらゆるものにあらわれている。

沖縄の人たちはとてものんびりしていて親しみやすい。私が沖縄へ修学旅行に行ったときも、はじめての人でも気さくに話してくれる。

私たちはもっと沖縄のことを知るべきだと思う。沖縄へ行ったことのない人はぜひ行くべきであると私は思う。

●参考資料

「沖縄チャンプルー辞典」
編者：嘉手川 学
発行所：株式会社　山と渓谷社
http://www.weeboo.com/index2.htm